

リオオリンピックを終えて

音声グループ
白木琢也

私は今年ブラジルのリオデジャネイロで開催されたオリンピックの国際映像配信業務に音声として8月1日から8月24日まで24日間の日程で携わりました。

現地までの移動は成田空港からドバイまで10時間、ドバイからリオまで14時間という長時間フライトで到着した時には心身ともにへろへろでした。

今回は柔道とレスリングの中継に携わり、国際映像配信として公平な中継をしなければなりませんが、日本人選手がメダルを獲得する瞬間は自然と力が入るのを感じました。また日本人選手が金メダルを獲得する瞬間を生で見ることもでき、とても良い経験になりました。

機材はオリンピックの中継サービスからの貸し出しで必要最低限以下の機材しか用意されておらず、ここにマイクを置きたいがマイクスタンドが足りないから別の手段で何とかする。といったことが多々あり日本がいかに恵まれているかを再認識しました。また今回はベルギーにある「UNITED」という会社からエンジニア6人と中継車2台をレンタルして中継を行いました。中継車は拡幅する車で日本とは規模の違いを実感し、エンジニアとは言葉の壁を感じながらも皆気さくで良い人で楽しく接することができました。



UNITEDの中継車 OB12

音声業務としては実況・解説を除いた会場の空気感や観客の声援、選手が倒れたり、シューズが擦れた時に生じる競技音を集音してミキシングしており、柔道では一つのミキシングコンソールにおいて



中継車の音声ルームの様子

- ・畳に仕込んだ13本のピンマイクのMIX
- ・カメラマイクやスタンドマイクといったFOP(フィールドオンブレイ)のMIX
- ・FOP、PA(会場のBGMやアナウンス)、観客、EVS(スローVTR)を合わせた最終のMIX

以上の3人体制で2つの畳を、レスリングでは畳ミキサーを減らした2人体制で3つのマットをそれぞれローテーションを組んで日々取り組んできました。

中継開始当初は果てしない日程に感じられ、慣れない食生活に弱音を吐きそうにもなりましたが、この経験は自分にとって人間的にも技術者としても非常にプラスとなるものでした。

今回得た様々なものを今後の生活に活かしていきたいと思います。



畳に仕込んだピンマイク